

小川貫弍著

## 『仏教文化史研究』

佐藤 達 玄

であるが、本書に収めた論稿はみなこれらの問題にふかい関連性をもつものである。と述べている。本書の目次内容を示すと次の通りである。

### 第一部 土俗神の仏教帰依

#### 一 仏教守護神の表象

- (1) はしがき (2) インド諸神の仏教帰依 (3) 仏教守護神の出現 (4) 仏教神の中国的受容 (5) 仏教神の日本的整備 (6) むすび

#### 二 パンチカとハリリティーの帰依縁起

- (1) はしがき (2) ガンダーラのパンチカとハリリティー (3) 仏教に受容された土俗神の説話 (4) 世記経などにみるパンチカの地位 (5) 観喜母の儀軌とパンチカのインド帰依 (6) 大黒天・鬼子母神の変容 (7) むすび

#### 三 十王生七経讃図巻の構造

- (1) 緒言 (2) 日本書道博物館本と仏国国民図書館本の比較 (3) 十王経本文とその頌讃の成立過程 (4) 十王経讃図巻A B C D四本の挿絵考証 (5) 結語

### 第二部 仏教文化の中国大衆化

従来の日本の仏教学研究方法は、一口でいえば原典による言語学的解明や、それらを基本とした哲学的な考察に終るものが大勢を占めていて、宗教としての仏教の思想や信仰がどのような形で一国の文化や伝統の中に摂取されたかということには、一般に関心が薄かったようである。最近になってようやく学会における研究発表も、あらゆる分野から行われ、人間の生活の場に直結した研究が盛んになってきたことは、仏教が宗教としてどのような役割を果してきたかを知る上で、極めて意義あることである。本書はまさにかかる新分野の開拓に先鞭をつけたものといえよう。著者は人も知る仏教文化史研究の第一人者で斯学に専念すること多年、その間にすばらしい成果を発表し、日本の仏教学界を推進している中心的存在であることはいままでもない。このような立場にある著者が、これまで

に発表された各種の論文を一冊にまとめて、インド・中国・日本へと、仏教が各地域に伝播し浸透した足どりを、広い視野から考察したものが本書である。

著者は序文の冒頭に「この書は、仏教の文化に関する史的な拙稿をとりまとめたものである」と前置きして、

仏教が中国の社会に、日本の国内にどのように受容され、さらに発展をみたかは、それぞれその土俗信仰や民族諸神との対決のありとを調べねばならぬ。そのとき仏教のもつ寛容の態度が認められるのは、その根本に汎神教的な性格があることの現象ではあるまいか。アジアの宗教となった仏教が多神教の様相から唯一神教的な浄土教や汎神教的な祖師禅に展開するのは、中国や日本の僧尼が真実一路に法を求めて歩んだ帰結ではなからうか。布教伝道のことは複雑多岐

一 目連救母変文の源流

- (1) はしがき (2) 目連伝説出現の背景
- (3) 目連救母伝説の進化 (4) むすび

二 大報父母恩重経の変文と変相

- (1) はしがき (2) 孝道仏典の出現 (3) 二種の恩重経と変文 (4) 経碑と変相
- (5) むすび

三 大唐三蔵取経詩話の形成

- (1) はしがき (2) 宋版の詩話と取経
- (3) 元明の西遊記の源流 (4) 大唐三蔵取経詩話の梗概 (5) 悪竜退治と西王母池 (6) 天竺国王舎城の取経光景、(7) 留守宅の悲劇と帰朝齋会 (8) むすび

四 「浄土」のシナ的受容の問題―浄土教劇、帰元鏡―

- (1) 問題の所在 (2) 廬山慧遠大師の実録 (3) 永明延寿禅師の実録 (4) 雲棲蓮池大師の実録 (5) 浄土教劇作者の真意 (6) 問題の解答

第三部 宋元仏教文化の影響

一 浄土教における日宋交渉

- (1) はしがき (2) 叡山浄土教の興起と宋土 (3) 草本選択集の執筆者 (4) 源空浄土教の伝統意識 (5) 宋代浄土教

文化の影響 (6) むすび

二 浄土教受容の一形態―常行堂と十六観堂―

- (1) 緒言 (2) 浄土院の発達と普及 (3) 日本天台の常行堂 (4) 趙宋天台の十六観堂 (5) 結語

三 宋元仏教の日本への寄与

- (1) はしがき (2) 唐宋の律令制と仏教 (3) 宋代仏教の動向 (4) 俊昉律師の入宋 (5) 律師帰朝後の活躍 (6) 東山泉涌寺勧進疏 (7) 清衆規式と十六観堂 (8) 東山泉涌寺の職制 (9) 布金と祠堂の意義 (10) むすび

四 草本「教行信証」の成立過程

- (1) 草本「教行信証」の内相と外相 (2) 草本における筆蹟群の類別 (3) 草本における執筆時の考証

五 親鸞聖人にみる宋朝文化の種々相

- (1) はしがき (2) 尊号真像銘文の書式と表装 (3) 自筆本・転写本の装幀 (4) 教学大系の構想と成書の形式 (5) 四六駢儷体文の修辞 (6) 宋朝文学とその書風 (7) むすび

第一部の「仏教守護神の表象」では、仏教がインドの各地に、さらに国外まで伝播し、

その地域における民族の神祇や、土俗の神々と直接間接に交渉をもつに至った過程を、インド・中国・日本に分けて考察を試みたものである。

次の「パンチカとハーリティーの帰仏縁起」では、財宝神パンチカ、多産の女神ハーリティー（鬼子母）二神像について、ペンチャワル博物館・ラホール博物館所蔵のものを写真で紹介し、その形体や性格がどう変っていったかを解説し、ガンダーラの土俗信仰の鬼廟から起った鬼子母伝説の発生をのべ、漢訳の鬼子母経は「財宝神パンチカと多産の女神ハーリティーの土俗信仰を仏教の立場からとりあげ、これに仏教的な解釈と地位をあたえた現存する最古の文献である」（四二頁）とのべて、仏教の守護神となる経過を説明している。この鬼子母伝説が国境を越えて、アフガニスタンの出土彫刻や西域の仏寺の画像に現われ、中国では寺院の門神として受容され、近世に及んで布袋和尚や関帝像に転化された（七二頁）。日本では空海の真言密教の請来と共に伝わり、大黒神として、家々の台所の守護神から、穀物の神田の神へと、生産と豊饒を司る神として広く世俗の信仰を集めた（七三頁）とのべている。

次の「十王生七経讚図巻の構造」では、偽経としての本経の日本書道博物館本と、仏国民国図書館本とを比較し、偽経の存在意義をとき、それは外来の仏教が中国の宗教となるための必要から生じたものであるとのべている。そして中国の家族制社会倫理との対決から、必然的に現われたのが本経で、「十王生経こそ累七斎普及の指導經典となった」（一四五頁）もので、この追善功德の理念が「朝鮮・日本にまで影響し、日常の習俗として広く深く普及して、近世仏教の基盤となつていく」（一四六頁）と結んでいる。終りに多くの「十王生経図」の写真を掲載している。

第二部の「目連救母変文の源流」では、西晋の竺法護訳の「仏説孟蘭盆経」を中心に論を進め、「六朝末期にはこの經典の所説によつて、七月十五日の盂蘭盆法会が中国仏寺の年中行事となり、中国における祖先尊崇、亡父母祭祀の仏教儀礼として家族制度社会の仏教倫理とな」（一六一頁）つたとのべ、法顯三蔵の見聞したインドの夏安居の様子を説明して、その当時の慣習が「後世のお盆の檀家参りやお中元品贈答の起源である」（一六三頁）と興味ある問題を指摘している。そして「目連救母の伝説は、仏寺に学んだ在俗の学士郎

たちによって、ひろく社会民衆の間にまで伝播し普及した」（一八七頁）という注目すべき発言がみられる。

次の「大報父母恩重経の変文と変相」では前論文に続いて、仏教における孝道經典を取扱っている。この父母恩重経は隋唐時代に現われ、母の恩を説くことに主眼がおかれた。目連救母の伝説と同様に、家族倫理を説く經典として唐代に流布し、敦煌地方では盛んに書写され、本経を石に刻んだ経碑や変相図が発見されたことを伝えている。本経の日本伝来は奈良朝で、中世の朱子学の盛行によつて、儒教倫理が注意されるにつれ、仏教の家族倫理をとく仏典として脚光を浴びたのであらうとのべている。

次の「大唐三蔵取経詩話の形成」では、南宋版「大唐三蔵取経詩話」三卷十七章の内容を紹介している。玄奘の西域求法については「大慈恩寺三蔵法師伝」があるが、「取経詩話では玄奘を中心人物としながら、大唐の皇帝から、西天取経の勅令を奉じた六人の僧と行者の一行の叙述」（二一四頁）で、説話の性格上、事実とは大分違っていることはいうまでもない。著者によると「北宋の末、帝都東京開封府においては、…店舗のたち並ぶ繁華

街、いわゆる瓦子の構欄（よせ）では、七夕がすぎたから目連救母の雜劇が上演されて、十五日まで七日間これが興行される慣例であつて」（二一一頁）、「北宋から南宋時代になると、庶民の集散する瓦子の構欄にまで出家者が登場し、舞台に出て仏書を説く和尚や、参禅を語る和尚が現われてくる」（二一二頁）とのべて、構欄に登場する伎芸僧の存在したことを指摘し、出家者が社会のあらゆる層に入っていたことを伝えている。この取経詩話は、その版木が磨滅するほど印刷された（二一三頁）というから、仏教の大衆化が一段と進んでいたことが知られる。

次の「浄土のシナ的受容の問題」では、サブタイトルに「浄土教劇、帰元鏡を中心として」と附しているように、前論文と同じ性格のものである。「中国における演劇は、庶民の拾頭した宋元時代から次第に盛んとなり、次の明清時代には一段と発達をみて、南曲の全盛期をむかえ」（二三四頁）この帰元鏡もこうした「南曲流行の風潮と明末清初の世相の上に現われたものであつた」（二三五頁）とのべている。帰元鏡の扱ふ浄土劇は四十二齣からなり、中国浄土教の開創者廬山慧遠と永明延寿、雲棲株宏の三代にわたる浄土教祖師の

事蹟を上演するものである(二三六頁)。「中国の近世となり、雜劇の流行によりその演劇に、脇役として出家者の沙弥や僧尼が登場するばかりでなく、仏教を主題としたものまでが現れた(二六九頁)」というから、戒律で禁じている「不得歌舞倡伎及往觀聽」(四分律)、「邪業覺觀戒」(梵網戒)すらも否定するほど、布教伝道のためには、僧俗の区別すらも意識していなかったことが窺われる。

第三部の「浄土教における日宋交渉」では、「日宋両国の浄土教は、外觀は共に天台系のもので主流をなしていたが、教学思想と実践行儀、その社会活動面では大きな相違がみられた」(三二二頁)と指摘している。「法然上人は中国浄土教を廬山・善導・慈愍の三流に甄別して偏依善導の一流を選択する立場をとったのに対し、南宋の宗曉・志盤は、歴代諸宗の中から浄土信仰の指導者を選び、諸宗の融合の風潮の中に浄土の思想と信仰をその紐帯としている。これは慈愍三蔵慧日の浄土思想に通ずるものである。この点は日本浄土教が純粹化を求めた宗派分裂と大きく相違するところである」(三二三頁)と結んでいる。

次の「浄土教受容の一形態―常行堂と十六

觀堂―」では、日本の浄土教は比叡山の「山の念仏」に始まるが、その念仏の道場が浄土院であるか、常行堂であったか、或は全く別個のものか、叡山浄土教の問題としても検討を要するとしている。だが、「日本天台の浄土教受容は、天台四種三昧の道場の随一である常行堂に、五台山竹林寺の念仏三昧の法を移植したところに、日本天台の浄土教受容の史実がある」(三四一頁)とのべ、「趙宋天台においては、天台觀經疏の研究からの教学が先ず樹立され、宗門の発展と共にその実践道場として十六觀堂の造立となる」(三三六頁)として、「浄土教を受容した日本天台と趙宋天台とは、民族と地域と時間の相違以上に、著しい受容の態度の上とその相違が認められ、それがそのまま浄土教受容による兩國天台宗門の夫々の発展の一齣であった」(三四三頁)と結んでいる。

次の「鎌倉仏教成立への宋元仏教の寄与」では、「唐宋の律令制と仏教」、「宋代仏教の動向」をのべた後、論述の中心が俊芿律師へと移っている。著者は俊芿が書いたという「清衆規式」に着目し、泉涌寺における職掌名が北宋の禅苑清規と関係あることを指摘しているのは注目を要する。それは俊芿と同時に

代の後輩にあたる道元の永平清規が、禅苑清規に範を取っているからである。入宋した両者が等しく禅苑清規を依用しているのも偶然の一致であるか、或は当時の一般的な傾向であったか、この辺も研究する必要がある。次の「草本教行信証の成立過程」では、詳細な書誌学的考察が中心で、草稿本の筆蹟の類似を写真判定によって理解を容易ならしめているところに著者の配慮が窺われる。

最後の「親鸞聖人にみる宋朝文化の種々相」では、親鸞が宋朝文化を積極的に摂取していた証拠として、次の五項目をあげている。

- ①親鸞の執筆した尊号や真像の銘文の書式と、その表装の様式
  - ②自筆本や転写本にみる袋綴の冊子本の新しい装幀法
  - ③親鸞の教学大系の構想や、漢文による著作、成書の形式、文章構成の点
  - ④親鸞の四六駢體体の文章について
  - ⑤親鸞の書く文字とその書風
- このような諸項目は、単に親鸞一人の特色でなく、他の人物の作品について考察する場合でも、一つの基準が示されたものとして注目したい。

以上著者の所説にしたがって記述したが、

或は誤って理解している点があれば、筆者の浅学の致すところとして御容赦いただきたい。とにかくこのような他の追隨を許さない数々の雄篇に接して、著者の研學態度に深甚の敬意を表すると共に、山積する未解決の問題にも解明のメスを振っていただきたいことを願って止まない。

（永田文昌堂刊、昭和四十八年、本文四七二頁、索引十九頁、定価四、八〇〇円）